

巻頭言 南泉斬猫 —— 猫はなぜ斬られたか

禅宗の公案の一つに、「南泉斬猫」がある。公案は禅の修業に用いられる短いエピソード的文章で、修行者はこれを与えられて悟りに至るよすがとする。南泉斬猫とは、こんな話である。

中国の唐代、高僧南泉のもとには多くの弟子が集まっていた。あるとき弟子たちが、寺内で二手に分かれて子猫を奪い合っている。そこに現れた南泉は猫を取り上げ、弟子たちを叱りつけて言った。「これはいったい何の騒ぎだ。おまえたち、この有様に対して何か気のきいた一言を言ってみよ。言うことができれば猫は助けよう。しかし言えなければ猫を斬ってしまうぞ。」しばらく待ったが、誰も答えられない。南泉はついに猫を斬った。その晩、所用で出かけていた一番弟子の趙州が帰って来た。南泉からこの話を聞いた趙州は、履いていたぞうりを脱ぎ、黙って頭の上に乗せて部屋を出て行った。これを見た南泉は「おまえがあの場合にいれば、猫を救うことができたものを」と嘆いたという。

この話は欧米にもよく知られていて、動物愛護の観点から、かなり評判が悪いらしい。たしかに猫が斬られるくぐりは衝撃的で、修行のためとはいえここまでする必要のあるのかと思える。南泉斬猫は「無門関」という公案集の中にあるが、この書を編んだ無門慧開も最後に、「趙州がぞうりを脱いで頭の上に乗せた意図は何か、まずそれを言ってみよ。もしもそれが示せなければ、この話は危険である」と注釈している。ぞうりを頭に乗せるとは、何を意味しているのか。そして我々はこの話から、何をくみ取ることができるのだろうか。

研究者の研究成果は、最終的には論文の形で完成されるが、まとめ上げるまでには、ゼミ、研究集会、学会などにおける口頭での討論を経る。従ってそこでの言葉のやりとりは重要な意味を持つが、それにもかかわらず、討論のスタイルがどうあるべきかといったことは、論文の書き方ほど定式化されていないし、注意も払われていないようだ。もちろん、論文並にマニュアル化されては自由な討論を妨げるが、その一方、非常識な議論のしかたが野放しにまかり通る傾向もないわけではない。欠点を押さえた上で、たたきのめすような乱暴な批判を浴びせたり、そこまで行かなくとも、データの取り方や研究の筋立てが未熟、あるいは話し方が要領を得ないことに苛立ち、冷笑し、露骨に軽蔑的な態度で発表者に屈辱感を与える例が、「指導教官」と呼ばれる立場の人々の間にさえ見られるのは残念なことである。私の場合、中高校生に勉強を教える仕事をするようになってから、こちらが少しでも苛立った気持ちになるだけで、敏感にそれを感じ取って思考停止に近い状態に陥る生徒が、案外多くいることに気づくようになった。いったんそうなると、ふだんなら容易に答えられる形にかみくだいても、もはや答えることができなくなる。程度の差こそあれ、このことは大学生、院生、また大人の研究者に

さえ当てはまることだろう。自信を失い、動揺すれば頭は働かず、言いたいことの半分も言えぬまま発表は終わり、あとに無念だけが残る。

禅宗というのは、一面「コミュニケーション学」ではないかと、私は理解している。いかにして互いに心地良い、かつそれぞれの力を最大限に発揮しうる人間関係を構築するか。それを静かな禅寺の雰囲気の中で、とことん突きつめる。いわゆる「禅問答」というのは、その究極の姿かもしれない。「南泉斬猫」についても、私はそうした観点からごく単純に考えている。「趙州がぞうりを頭にのせた意図」という、慧開の問いから入るなら、本来足の下にあるべきぞうりが頭にのっているという状態は、何かさがさまになっていることを暗示しているだろう。では、何がさがさまなのか。

言葉の順序というのは、しばしば侮りがたく重要である。たとえば、「あいつはいいやつだが、だらしがない。」と、「あいつはだらしがないが、いいやつだ。」これらは同じことを言っているだろうか。内容が同じで順序だけ違うのだが、ただそれだけで、極端に言えば前者は相手の人格の否定であり、後者は肯定である。それに伴い、受け手の心象はがらりと変わる。「言えれば助けるが、言えなければ斬る」と聞いた弟子たちは、取り合いするほどかわいがっていた猫が、無残に斬られる姿を想像して青ざめた。もし、「言えれば助ける」で終わっていれば、ああ、お師匠さんは助けるのだ、と、一瞬ほっとする雰囲気の中から、「気のきいたひとこと」が飛び出したかもしれない。その場の雰囲気を凍りつかせ、弟子たちの自由闊達な発想を奪った南泉の行為を、趙州はぞうりを頭に載せるというシンボリックな動作で批判し、南泉もまた瞬時にそれを認めて反省した…。そう考えると、この話の登場人物たちが不可解な「禅問答」の世界から抜け出して、生き生きと働いて来るように思われる。解説書のたぐいを見ると、南泉斬猫については「猫の身になって悟る」「下座業」など、複雑なことは書いてあっても、私の「語順説」に類するものは出てこないのだから、当代の禅宗の受け取り方にはそぐわないのかもしれない。しかしこの話が書かれた当時、少なくとも第一義の意図としては、上述の見方が踏まえられていたはずであると、私は信じている。

言葉の順序を変えただけで、思考が凍りつくのが人間である。研究討論においても、そうした面への配慮を欠くことで多くのものが失われているのではないかと。我々は、いかに多くの猫を斬ってきたことだろう。気づかいが過ぎて馴れ合いに陥ることは避けねばならないが、一方で、人間が本来的にもつデリケートさに配慮した議論の仕方というものもあってよい。「今西進化論批判の旅」（築地書館）を著したイギリスの進化学者 L. B. Halstead は、日本のマクロ生物学における「京都学派」の雰囲気には、イギリスのオクスフォードに共通するものがあるとし、次のような趣旨のことを述べている。「オクスフォード大学人は、自ら優秀であることを知っているがゆえに他者に対して寛容であり、議論は率直にして、しかも相手に劣等感を抱かせない。」

あまり優秀でない私たちも、姿勢だけはこれに学びたいものである。